

女人禁制

豊島与志雄

青空文庫

女人といつても、老幼美醜、さまざまであるが、とにかく、女性として関心のもてる程度の、年配と容貌とをそなえてる方々のことなのであつて――。

一

汽車の寝台ではよく眠れないという人が、ずいぶんあるようだが、私はそれが腑におちない。充分に手足をのばせない憾みはあ

つても、縮こまっていた方がよくねつかれる道理で、しいて眠ろうとする時に人は大抵、布団の中で縮こまるものなのである。車体の動揺がせわしいといつても、人は子供の折身体を揺ぶつてねかしつけられたものであるし、列車の振動は謂わば大人の揺籃の揺ぎなのである。その上、夜前たいてい、食堂で少々酒類もつきこんでいようし、寝すごしてもボーイが起してくれろという安心もある。というわけでもないけれど、私は寝台車では実によく眠れる。朝は制限時間の八時近くでなければ起きない。

そこで、起きだしてみると、寝台車の午前八時といえは殆んど白昼で、多くの席はきれいに片付いていて、身仕度ととのえた人ばかりか、食事までもすました人が、新鮮な顔を並べている。だ

が、そんなことは平気だ。起き上って、スリッパをつっかけて、着変えようとする……。

彼女の眼がひそかに私の方に注がれているのだ。行儀よく坐つて、顔にはもう軽い化粧までして、窓外の景色を見るような風をしているが、へんに輝いた好奇心な意地悪いその眼は、私の方を見るような見ないような、それでいて微細な点まで見て取っているのだ。

その視線の前に、私は凡てを露出する外はない。服の着方、釦のはめ方、ネクタイの結び方、片手で乱れ髪をかきあげる癖まで……そして和服の時には、襟を合せる様子から、帯を結ぶ手付まで……其他無数の細かい事柄。それらが車の動揺のために、凡て

ぎごちなく、随つてまた浮出して目立つに違いない。

妻か或はそうした者ならば、まあよいけれど、彼女であつてみれば、私にもやはり変な見栄とか羞恥とかもあるうし……おう、もう寝台車で一緒に旅するものではないと考えていると、「ずいぶん寝坊なさるのね。」

い気のこもらない皮肉な調子は、彼女がほかのことを思っている証拠だ。

二

銀座通りはおかしなところで、夜の十一時頃からがらりと様子

が変る。今まで賑やかで華やかで浮々していたのが、すーっと陰にこもってくる。饗宴の室に一時に防音装置をしたような……顔の紅や白粉を俄に洗い落したような……笑ってる最中に歯が一枚ぬけ落ちたようなものである。戸を閉めた商店の間々に、まだ戸の開いてるのはしんと静まり返り、歩道の夜店はしまいかけている。なお人通りはあるが、どの顔も佻しげで、兇悪の相さえ帯びている。享楽の滓が幽鬼となつて、そこいらの物影にひそんででもいるのだろうか。

そういうところを歩くのは、殊に微酔をおびて歩くのは、悪くはない。私は好きだ。けれど彼女は、どうしたのか、へんに憎えてるようだ。憎えてるだけならよいが、なんだか寒そうで、貧相

で、見すばらしい。その敏活な清い眼は、もう凍りついて動かない。そのふくよかな色艶は、もう皮膚の下に沈みこんでいる。そのやさしい香りは、もう消え失せてしまっている。そして肩をすぼめ、身体を硬ばらして、とつとつと足早に歩く。時々、急に寄りそつてくるし、またつと離れる。勿論口など利かない。そうなつてくると、何のために歩いてるのか分らなくなる。一体銀座通りは、目当てなしに急いでつき切るべき処ではなく、ぶらりぶらりと歩くべき処だ。コーヒーの香りかビールの泡に身を任せておくべき処だ。それを彼女は、木で出来た人形のようにぎごちなく、而も足早に歩いていく。私もしたがって足を早める。だが、身体は追いついても、心は後れる。もう見ず識らずの他人だ。他人の

あとについてゆくくらいばかげたことはない。

もう十一時過ぎなのか。だが十一時を過ぎても、他の場所だつたら、たとえしんしんとした神社の中でも、淋しい野の中でも、彼女は何かしら生々としたものを、血の通つてるものを、示してくれるだろう。ところが銀座では、彼女は血の通わない自動人形だ。なぜだろう。もうこんなところを一緒に歩くものではない。そこで、私の心は更に後れ、身体まで後れてくる。然し彼女は知らん顔で、とつとつと歩いてゆくのだ。

東京湾で舟を乗りまわすのは面白い。乗りまわすといっても、和舟にモーターのついた、舟宿から出してくれるあれだ。

冬は鴨猟。夜のひき明けがよいので、少し寒いのが五時頃、薄暮のうちから出かけるのである。御猟場の近くには、何度あらししても、また鴨が出てきている。対岸の木更津付近には、何万という鴨がついている。鴨に交つて、鵜や鷺や雁もいる。鷗は禁鳥だ。昔はモーターの音を嫌ったものだが、近頃では却つて帆影を恐れ、モーターの音には馴れている。わりに近くまで寄せられる。ぱつと飛び立つところを打つのだが、たといそれでも、朝の海上にターンと響く銃声だけでも爽快だ。

夏は投網。御台場の近くから、更に先方、或は江戸川口の方へ

と、それは潮加減による。ぱつと網が空を切つて、円く拡がつて水面におちると、速力をゆるめながら舟をくるりとまわすのだ。鱸、鯖、太刀魚、鰯、其他雑魚まで、数時間でバケツ四五杯はとれる。時には、魚群の上に全速力で舟をやると、魚の方から舟の中にとびこんでくる。

凡ては船頭任せだ。私たちはただ寝ころんで、空を眺め、海を眺め、煙草をふかし、雑談にふけり、鳥か魚かを珍らしがり、手で弄び、或は即席に料理して酒の肴にするのもよい。

然るに、元氣だつた彼女が、いつしか黙りこんで神妙にひかえている。獲物は固より、空の雲にも遠い帆影にも、もう興味をもたなくなつたらしい。気分でも悪いのかといえ、そうでもない。

腹でも痛いのかといえ、そうでもない。茶もサイダーも口にせず、いやにつんと澄しかえっている。何か彼女の機嫌でも害したことがあるのだろうか。だが、そんなことにかまってはいられない。広々とした空と海とのなかだ。些細な事柄は微風が吹き払ってくれる。

彼女の機嫌はいつまでもなおらない。そして、つんと上品に澄んでいたのが、急に、もじもじ身をくねらして、顔をほんのり赤らめて、「あのう……先生、」或は、「ねえ……××さん。」

そうこられると、こちらはちよつと面喰うのであるが、それがなんのこと、おしっこなのだ。子供や男のおしっこならよいけれど、女の方のは大変だ。舟を海岸に走らせ、而もそこいらに用を

足せる場所があるかないか。そうなつてくると、晴れやかな朗かな海上の興趣もふつとんでしまつて……ああ、何の因果ぞや。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社
1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006年4月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女人禁制

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>